

東日本大震災発災直後の都市計画コンサルタントの活動に関する座談会の要旨（報告）

催日時 11月26日（金）15時～17時

開催場所 パシフィックコンサルタンツ本社

1. 開 会

2. 経過説明【東北地区協議会 齋藤】

3. 座談会（敬称略）

参加者

元（株）日本工営 大元 守 氏

（株）UR リンケージ 都市整備本部計画部 次長 板橋正明 氏

（株）プレック研究所 執行役員 都市・文化部門 都市・地域計画部
部長 吉田 禎雄 氏

（株）オオバ 東北支店 齋藤 明 氏

進 行

（株）オオバ 東北支店 齋藤 明 氏

4. 閉会

5. 座談会の内容

- 震災復旧・復興に関する業務の従事
- 復興まちづくりのあり方（富岡町の復興まちづくり）
- 福島県の復興祈念公園づくりを通して
- 双葉町の特定復興再生拠点づくりを通して
- 大熊町の特定復興再生拠点づくりを通して
- 意見交換
- まとめ
- 3県座談会の総括

6. 座談会の概要

1) 震災復旧・復興に関する業務の従事

○ 板橋

- ・岩手県の被災現況調査、高台移転検討、宮城県の復興業務、福島県双葉町の復興拠点の業務に従事

○ 大元

- ・福島県沿岸部の被災現況調査・復興パターン調査、富岡町の除染前建物被害調査、石巻市の建設技術管理監として石巻市市街地部・李半島部の復興業務、福島県富岡町の復興業務に従事

○ 吉田

- ・岩手県陸前高田市の復興パターン調査、福島県における復興祈念公園基本構想業務に従事

○ 齋藤

- ・宮城県松島町・七ヶ浜町の被災現況調査、石巻市釜・大街道地区の復興パターン調査、石

2) 復興まちづくりのあり方（富岡町の復興まちづくり）大元氏

- ・多重防御施設、避難計画、復興まちづくりでは技術士会のメンバーとともに座談会やワークショップによりプランづくりを行った。富岡町の復興まちづくりでは帰還した中学生との職場体験や区長会が中心となった地区の復興計画づくりを支援した。
- ・復興まちづくりでは住民意見の反映が重要だ。昨今の自然災害への備えでも地域特性を熟知している区長との連携や、事前防災の取り組み、地域や地区のリーダーの育成や確保が必要だ。

3) 福島県の復興祈念公園づくりを通して 吉田氏

- ・公園計画地東側は海岸防災林、南側は中間貯蔵施設用地、西側は復興産業拠点（アーカイブセンター立地）と周辺の土地利用をみると同拠点を除いて主にオープンスペース（非可住地）である。
- ・震災以降避難が継続している中、公園の空間構成は、基本理念に示した縁（よすが）をつなぎ、息吹よみがえる場を特に重要視したものとなった。

4) 双葉町の特定復興再生拠点づくりを通して 板橋氏

- ・双葉町は帰還困難区域が町の96%を占め復興は長期戦である。
- ・帰還するつもりがないとする町民が半数以上を占める中、「いつ町に戻るか、町の将来をどうするかは、国が決めるのではなく、町がどうしたいのかをしっかりと打ち出し、国に実現してもらおう」ということを町民委員の方々に伝え、議論を重ねて特定復興再生拠点づくりのベースとなる、「復興まちづくり長期ビジョン」をとりまとめた。
- ・2014年の福島復興再生特別措置法の改正により2017年には約550haの区域が特定復興再生拠点到認定され、2018年には中野地区の産業拠点、2020年には東日本大震災原子力伝承館、JR双葉駅が開業した。
- ・特定復興再生拠点区域のうち双葉駅西側の24haで公営住宅用地の整備が進められ、帰還者と移住者が共に住むまちづくりがはじまっている。

5) 大熊町の特定復興再生拠点づくりを通して 齋藤氏

- ・大熊町役場が整備され、東京電力関係者が1,000人単位規模で住んでいる。建設業者のJV事務所、給食センターもある。戸建ての住宅地群は復興公営住宅で50世帯ぐらいが入居され、東側にも、増築、現在、整備中である。交流ゾーンには、一時滞在施設の建築が立ち上がっている。
- ・首都圏等の大学と帰還困難区域の各市町が連携して研究ラボを作る復興知事業が進められている。農業では、見せる農業、花き栽培、南相馬市でのトルコギキョウが盛んに行われており、祈念公園でも花木の情景を見せていく仕組み作りがされている。大熊町では杜のいちご（宮城県）が主導してイチゴハウスを作り、帰還者の就労の場となっており、増産・増設体制になっている。

6) 意見交換

○ 大元

- ・福島は複合災害でなかなか厳しい地区だ。富岡町には釣り船があって、大きなタイが釣れる。一番大事なのは、放射線に対する正しい理解。県外の人が福島の高産物をなかなか買わないので、国にお願いするなど、きちんと取り組むことが必要だ。
- ・イチゴ栽培にあったように、自分たちの生きがい、やりがいを作り上げていく。生活が成り立ってのまちづくりなので、明るい自然で風光明媚な福島沿岸部を取り戻したい。

○ 吉田

- ・皆さんに来ていただける場所づくりが必要だ。震災後しばらくは、話題にすることが憚られたが、今は大勢の人に来ていただける振興策が展開できればと思う。グリーンインフラとして、人を呼び込む力が緑にあるので、緑プラスアルファで人を呼び込む機能を意識して整備を進めたい。
- ・新産業を沿岸部に導入し産業振興を図る取組が進んでいる。同時に地域の歴史、文化も重要視してそれらの延長線上に新しいものを導入することで地域の魅力がますます輝くと考えるので、地域の独自性を一度掘り下げた後、新たな要素の付加を目指せればと思う。

○ 板橋

- ・広域的な取組みとしてイノベーション・コースト構想があり、国で復興を下支えしており、関連施設がかなり出来ている。特定復興再生拠点の整備により、ある程度、帰還者や新たな居住者を呼び込む土台もできている。次の段階では、施設をより効果的に持続的な発展につなげる取組みが必要で、地域に根ざしてコーディネートやプロデュースする人材の育成が不可欠だ。人材が育つまではコンサルタントの活用や外部の専門家が支援する必要もある。

7) まとめ（齋藤氏）

- ・宮城座談会では、平時から災害に対する取組みをしないと大変だという意見があった。自分の地域の弱いところを、自治体や県単位で共有しないと、災害が起きた時にすぐに動けない。
- ・岩手座談会では、高台に移転するイメージが共有しないまま復興まちづくりを示しても、住民がなかなかのってこない、合意形成の手段として、ワークショップをするなど、住民が復興に直接携わらないとゴールにたどり着かないという意見があった。制度設計では、防集で農地が買えないので区画整理で括ったことが事業の大規模化に至ったことが反省だったという意見もあった。
- ・技術士会では宮城県の遠藤副知事に講演をしていただき、コンサルタントに対してメッセージがあった。震災の復旧復興では、様々な人の協力が不可欠で、建設コンサルタントが、宮城県の復興に関わるプラン作りに相当に注力してもらった、こういうステップがないと、次の事業の段階にスムーズに移れなかった。復興のボリュームを当初から想定できて、国の調査とともに道筋が立ってきたことが、今回の経験の中で得られたというお話をされた。
- ・復興は、被害をリカバリーして、しなやかに回復していくというレジリエントがよく言われるが、従前のさまざまな課題があり、日頃から、きちんと把握して、すぐ行動できるような仕組

みが必要だ。それも視野に入れ復興に携わることが、コンサルタントとして不可欠だ。

8) 3県座談会の総括（坂口委員長）

- ・昔の都市計画は、プランニングで終わっていたが、実現の手ほどき、地域の担い手による推進、その仕組みを我々がどうコーディネートしたかも踏み込んで活動したとことは、本当に高度な技術が必要だったと改めて思った。
- ・この手法は、震災復興のまちづくりだけでなく、通常まちづくりにおいても十分に反映できるものだ。復興特別委員会としてしっかりと記録に残して、これからの計画作りに生かせるように取りまとめていきたい。



写真 座談会の様子